

【博士論文要約】

論文題目：18 世紀における〈知〉の形成と展開

——幕臣・成島道筑と在地の指導者の学問・思想の関係性——

鈴木愛

1. 本論文の構成

序章（近世の民衆〈知〉と思想をめぐる研究の成果と課題）

- 一、なぜ、成島道筑に着目するのか
- 二、〈知〉の受容から展開へ
- 三、〈知〉をめぐる研究史
- 四、在地の指導者をどう捉えるか
- 五. 本論文の構成

【第一部 幕臣・成島道筑の基礎的研究】

第一章 成島道筑の学問と思想

はじめに

- 第一節 伝記史料に見る道筑——各史料の性格と出自について
  - 第二節 伝記史料に見る道筑——『飛鳥山碑』撰文
  - 第三節 伝記史料に見る道筑——村役人層との関係
  - 第四節 道筑が築いたネットワーク
  - 第五節 道筑の学問観——門人の講義録（『書紳遺言』）から
  - 第六節 道筑の学問観——門人の講義録（『芙蓉楼玉屑』）から
  - 第七節 道筑の学問観——奥貫友山宛ての書簡
  - 第八節 道筑の学問観——門人の講義録（『处世往来』）から
- おわりに

第二章 成島道筑と享保の改革

はじめに

- 第一節 紅葉山文庫と『名家叢書』——「成嶋考」をめぐって
  - 第二節 『幕府書物方日記』にみる成島道筑
  - 第三節 「成嶋考」「深見・桂山・成嶋考」の成立経緯と内容
  - 第四節 「成嶋考」と享保の改革
- おわりに

第三章 農政改革と成島道筑

はじめに

- 第一節 『民間省要』『農家貫行』の序に見る道筑の思想
  - 第二節 道筑の農政思想——『墾田之古法』の分析から
  - 第三節 『農事大全』に見る道筑の農政改革論
- おわりに

## 【第二部 十八世紀における在地の指導者の思想】

### 第四章 奥貫友山の学問と思想

はじめに

第一節 久下戸村と奥貫家

第二節 伝記史料にみる奥貫友山

第三節 奥貫友山と師・成島道筑

第四節 寛保の大水害

第五節 家督相続と正俊宛ての「遺書」

第六節 明和の伝馬騒動と晩年の「遺書」

おわりに

### 第五章 池上幸豊の思想形成

はじめに

第一節 池上家の由緒と大師河原村

第二節 池上幸豊と成島道筑

第三節 池上幸豊の新田開発事

——成島道筑との関係性を中心に

第四節 幸豊の晩年の思想

——新田開発事業の展開と砂糖の国産化を踏まえて

おわりに

### 第六章 「民間省要」と田中休愚の思想

はじめに

第一節 「民間省要」に見る休愚の百姓観

第二節 十八世紀の在地の指導者の苦悩と葛藤

第三節 「民間省要」成立とその後の社会

——休愚と道筑の関係性を中心に

第四節 「民間省要」が道筑に与えた影響

おわりに

### 終章 十八世紀における〈知〉の形成と展開

——成島道筑と在地の指導者の学問・思想の関係性

一、道筑の学問・思想とその変化

二、成島道筑と享保の改革

三、在地の指導者の学問観と思想形成

四、道筑と在地の指導者との関係性から見える十八世紀社会

五、課題と展望

参考文献一覧

## 2. 先行研究の成果と課題

近世の民衆の〈知〉を問題にする際に踏まえておくべきは、民衆思想史研究と、多くの民衆の営

為の場であった地域社会をめぐる研究動向である。これらの研究で〈知〉を視角として論じられてきたのは、民衆の学問・書物受容や主体形成、自治・行政能力の獲得、民衆知を踏まえた献策動向などである。これらの視角を踏まえながら、研究史と論点を整理したい。

近世の民衆の〈知〉をめぐる研究は、民衆思想史研究が確立した 60 年代を契機に進展した。これ以前の思想史研究が対象としていたのが本居宣長や荻生徂徠ら「頂点的思想家」であり、「民衆の思想」が対象とされていない点を問題とする議論が安丸良夫ら民衆史研究の潮流から提起されたことによる。70 年代には安丸らの民衆思想史研究の潮流を受けて、宮沢誠一らによる領主層と百姓の間の関係意識を問う研究成果が出された。17 世紀半ばの初期藩政改革の分析から、領主層が「御百姓」に御救・御恵といった「仁政」を施すことに対応して、「御百姓」は領主に年貢を納めていたという相互の関係意識を「仁政イデオロギー」論として提示したのである。深谷克己は 70 年代半ばに、それまで革命的伝統であると位置づけられていた百姓一揆について「幕藩制国家の存続を前提とする階級闘争」だと指摘した。さらに深谷は 80 年代に入ると、領主と百姓の間には合意形成と捉えてもよい関係意識が形成されていたとする「百姓成立」論を提示。深谷は「百姓成立論」や「民間社会論」を基盤に民衆と領主層の関係性についても問題提起した。さらに同時期、朝尾直弘も領主と民、領主と家臣の間に契約や合意といった関係性があると論じた。

学問（儒学）を受容する民衆が注目され、地域社会の豪農・村役人層の自律的な自治・行政能力が提起されたのが 80 年代である。学問や文化、思想を扱う研究領域においても、地域社会をめぐる研究においても、研究史が大きく動いた時期だと言える。

豪農らの学問受容と並行して、村役人層の地域社会における役割も再考される。幕藩体制の構造や階級闘争、近世の地域社会を論じるうえで基盤となっていた佐々木潤之介の豪農論を乗り越えるべく、地域社会の自治や運営をめぐる多岐にわたる研究が提示された。渡辺尚志は、これまで一面的に捉えられていた豪農を三類型で示し、豪農に多面性を提示した。久留島浩は民衆が行政能力を蓄積し、合理的な地域行政機構を構築していたことを評価する。民衆の献策動向を分析した平川新は、近世社会の転換期である 18 世紀半ば以降の動向として「領主層が民衆に政策提言を求め始め」たほか、民衆からの献策活動も積極的に行われていたと指摘している。動揺する幕藩体制の中で、村役人らの持つ在地の知識は無視できないものとなっていた。平川は村役人らが財政再建など領主層の抱える問題解決も視野に、地域社会の窮状を解決する策を示そうとしていたことを明らかにした。豪農・村役人層に関して、行政・訴訟能力、公共的な役割の獲得といった側面から研究が重ねられてきたと言える。

地域指導者の学問受容や自治・行政能力の分析の多くは近世半ば以降、18 世紀末から 19 世紀を対象としている。つまり、先行研究が「画期」と位置付ける 18 世紀半ば以降の時期については豊富な研究蓄積があるものの、18 世紀前半の村役人・代官ら在地の指導者層の意識や思想を対象にした研究は多いとは言えない。「画期」の実相を知るには、18 世紀を通じて在地の指導者層の意識・思想の変化を示す必要があるだろう。

さらに、90 年代以降、書物を分析対象とする研究動向は、民衆が受容した学問や知識の実態に関する研究水準を高め、領主層から民衆まで同一の知識を共有していたことを提示し、書物の受容とそれを踏まえた民衆の主体形成をも明らかにしてきた。若尾政希は民衆と領主層が共通して受容した書物を対象とした研究から、読書が思想形成や主体形成に深い影響を与えていることを明示した。17 世紀に刊行された書物『太平記評判秘伝理尽鈔』を対象とし、同書が領主層・民衆に受容され、当該期の社会における政治意識や社会通念を形成したことを提示した。書物が誰にどのように読まれたのかを問う研究手法は書物研究のみならず、多様な歴史研究の手法の一つとして確立されてい

る。さらに、若尾は、領主層・思想家・民衆の「三者の相互の関係性を問うていかねばならない」と指摘し、「関係意識」という分析視角により、60年代以降30年余にわたり交わることの無かった思想史研究と民衆思想史研究の潮流を総合的に考える礎を作った。

領主層と民衆の知的関係性について先行研究では、領主層と民衆、領主層と家臣といった枠組みで研究が深められてきたが、幕臣と村役人との具体的な関係性やネットワークに関する検討は多いとは言えない。村役人層が政治、文化の両面でネットワークを有していたことは周知のとおりだが、本研究では身分を超えた知的ネットワークについても問題としたい。

また、「受容」された知識はどのように活用されたのか。先行研究では、家訓書や地域農書、地方書等として編纂され、活用されることが指摘されている。〈知〉は社会においてどのように流通し、展開していくのか。流通や展開の側面を分析できれば、当該期に必要とされた〈知〉が何かを明らかにできる。〈知〉の形成・流通・展開過程では、さまざまな人、情報、書物等に出会い影響を受けることが必至である。〈知〉を視角として、これまで見えてこなかった関係性（ネットワーク）を明らかにできる可能性も期待できる。〈知〉の形成・流通・展開を確認するためには、村役人層の意識や思想に踏み込み、思想形成過程を分析し、重ね合わせ複合的に分析することが必要だと考える。

### 3. 本論文の課題と方法

近世の民衆〈知〉をめぐる研究史の検討から、①18世紀社会における〈知〉の形成・流通・展開過程の分析、②〈知〉の流通状況から浮かび上がる階級を超えたネットワークの提示、③18世紀半ばの地域社会における「画期（転換期）」の思想的背景の考察——という3点の課題を導き出した。この3点に関し本研究では、幕臣・成島道筑と門下の在地指導者の関係性を分析することで明らかにしようと試みた。

道筑と在地の指導者層の関係性を分析するに当たり、基礎作業として、両者の思想形成過程を分析した。幕臣と村役人層という階級を超えた関係性に迫ることを目的とし、両者の思想形成過程を提示した後、それらを重ね合わせて時系列で複合的に分析することを試みた。

本研究の主たる分析視角は、広義の〈知〉という概念である。〈知〉を分析視角とすることで、単に接点や交流レベルのネットワークの提示に留まらず、交友の背景やいかなる〈知〉のやりとりがあったのかについて、具体的に示すことを目指した。

本研究が分析対象とするのは、幕臣・成島道筑と、関係の深い3人の在地指導者（久下戸村名主・奥貫友山<1708～1787>、大師河原村名主・池上幸豊<1718～1798>、川崎宿名主で後に代官に登用された田中休愚<1662～1729>）である。

成島道筑は表坊主から奥坊主組頭、御同朋格御書物預などを務めた幕臣で、『成島道筑信遍略譜』『源信遍子陽伝』といった複数の伝記史料が残るほか、将軍・吉宗の諮問に答えた報告書群と言われる『名家叢書』に単著の「成嶋考」を含む8点の報告書が収められている。また、道筑は蓑正高の『農家貫行』や常盤潭北の『野総茗話』といった諸本に序を寄せているほか、晩年には、農事に関する著述を複数残している。これらをできる限り時代を特定し、時系列に沿って分析することで道筑の思想形成過程や学問観を提示する。

3人の在地の指導者について分析素材とするのは、日記、記録（メモ）、学習ノート、書簡、遺書——といったあらゆる記録類と公的あるいは第三者による記録（例えば御用留等）である。道筑の生涯について思想形成過程を基軸に据えながら分析した後、道筑と親交のあった3人の村役人について学問や思想形成を追う。道筑を含む四者の思想形成過程をそれぞれ明らかにしたのち、時系列で整理し、影響関係を複合的に分析していく。この際、四者以外の関係者の存在（新たなネットワ

ーク)を発見できる可能性が極めて高いことから、この点を可視化することも目標の一つに据える。四者の思想形成過程を分析する際には、当該期の社会情勢とも切り結びながら考察する。

#### 4. 本論文の概要

本論の目的は、18世紀の地域社会に必要とされた、学問や書物の知識、情報といった〈知〉がどのように形成され展開するのかを、幕臣・成島道筑と、門下の村役人（在地指導者）との関係に着目しながら明らかにすることである。道筑側の学問や思想形成過程を分析し、道筑の享保改革への関与を検討する第1部と、三人の在地の指導者（村役人）の学問と思想形成を分析し、道筑との関係性を検討する第2部で構成する。

第1章では、成島道筑に関する先行研究をまとめ、取り組むべき課題を明らかにした上で、道筑の人物像を史料を基に分析し、門人への講義録や書簡から、道筑の学問観や思想に迫った。道筑関連の史料は、①吉宗の諮問に答えたとみられる報告書類（「成嶋考」など）、②農事に関する提案書や記録、③学問に関する記録（門弟による講義録）、④その他（和歌や幕府行事の記録）——の大きく4つに分けられる。このうち、①と②は享保改革との関連を指摘した。

第2章、第3章では、道筑の享保の改革への関与について検討した。第2章では、吉宗の諮問に近侍する学者が答えた報告書の中から、道筑が執筆した8冊（共著含む）を抜き出し、その成立過程や内容分析を通じて、道筑の調査内容や、実際の政策との関連性を考察した。道筑は少なくとも、奥坊主就任直後の享保4（1719）年から政策立案の過程に関与していたことを指摘した。

第3章は、道筑の農政改革との関連を分析するため、農事・農政に関する道筑の著述を時系列に沿って整理し分析。道筑の農政改革への関与を指摘した。道筑は晩年、農事・農政に関する4書をまとめた『農事大全』を著した。道筑が『農事大全』に記したのは享保の農政改革への批判であり、最大のポイントは、百姓を勧農すべき「農師」が不在であることへの批判だった。道筑の批判や指摘は具体的、且つ細部に及ぶもので、情報量もかなりのものだった。道筑が長年にわたって在地の状況を調査し続けたことがうかがえる。長年の調査に基づく道筑なりの農政改革論が『農事大全』だったと考えられる。学問や書物の知識と、こまめな情報収集による在地の情報が組み合わさる形で、道筑をめぐる〈知〉は形成されていった。道筑の〈知〉が享保の改革に活用されたことを考えると、道筑の〈知〉には幕藩体制の維持に必要な要素が盛り込まれていたと言える。

第2部では、道筑の門弟である奥貫友山と池上幸豊、および道筑に『民間省要』を預けた田中休愚に焦点を絞り、学問観や思想について道筑との関係性に着目しながら分析した。在地の指導者らを分析する際、村（地域社会）の状況や、自然災害などの社会状況、関連する幕府の政策や動向などを照合しながら当時の状況を描き出すことを目指した。

第4章では、武蔵国川越の名主・奥貫友山と道筑との関係性について、相互の〈知〉のやりとり注目しながら時系列に沿って分析し、当該期、在地に求められていた〈知〉とは何かに留意しながら検討した。友山はその生涯を通じて4通の「遺書」を残している。分析の際は「遺書」を柱に据え、前後の時期の家や村、地域社会の動きを重ね合わせながら考察した。遺書を基軸とした友山と道筑の関係性の分析からは、これまで理由が不明確だった友山の遺書執筆の動機が見えてきた。さらに、晩年の遺書からは、百姓に対する警戒心や不信感を滲ませるなど友山の複雑な立場や苦悩が垣間見えた。上（幕藩権力）にも下（百姓）にも警戒心を持っている様子が読み取れた。動揺する幕藩体制の中で上からの重圧と、変容する地域社会の下からの突き上げの中で矛盾を抱え、苦悩する友山の姿を見ることができた。

第5章では友山の抱えた矛盾や苦悩が、当該期の他の村役人にも通じるものではないかとの問題

意識のもと、道筑の門弟である池上幸豊の思想に迫った。その思想を時系列で分析するため、幸豊の日記や随筆を主な分析対象とした。この中には、確かに「村をさ」の苦悩が記されており、上（公儀）と下（百姓）の間で、名主とは苦しい立場にあるという幸豊の意識を明らかにした。

第6章では、川崎宿の名主役だった田中休愚の思想を分析し、三者（休愚、友山、幸豊）の「悩み」の背景や実態を比較した。『民間省要』を対象として休愚の「百姓への視点」に着目し、休愚が抱えていた悩みの実態を探った。この結果、「百姓との関係（＝下からの突き上げ）」に関しては、三者ともに村方騒動や騒動に発展しかねない諍いに苦悩する様子が見られた。「上からの重圧」に関しては三者ともに感じていたが、その感じ方には濃淡があった。この差異は、村方騒動をめぐる領主層から何らかの処罰を受けたかどうか起因している可能性が高いことを指摘した。道筑は農事・農政について言及する際、必ずと言っていいほど、休愚の名前を挙げ、休愚から聞き及んだ内容などを記した。道筑は休愚から得た知識や情報（主に『民間省要』）を受容したうえで、それを村役人層に還元（展開）していたことを指摘した。

終章では、第1部・第2部の成果をまとめたうえで、今後の課題と展望を示した。

## 5. 本論文の成果と課題

本論の考察により浮かび上がった事実として最初に指摘したいのは、道筑の享保改革への関与である。道筑の関与について先行研究では、法制度改革や旧儀古制の研究への関与の「可能性」が指摘されてきたものの具体的に史料から明示されてこなかった。特に農政改革において道筑は、地域社会が抱える問題を調査し、課題解決のための実践的な方策を提案。池上幸豊との「海中新田開発」実践の過程からは、施策の試験や実現に向けて自ら尽力する姿も明らかにすることができた。享保改革の地域政策に関してはこれまで、農財政官僚機構の整備やそれと並行して機能した大岡忠相配下の地方巧者グループの地域支配の状況が明らかにされてきた。しかし、道筑の存在に関する言及はほとんどなされてこなかった。また、道筑の農政の書はこれまでほとんど分析がなされてこなかった。道筑の農政改革論を明らかにし、道筑の享保改革への関与を明示したことは本論の成果の一つである。道筑が地域社会に蓄積された〈知〉をすくい上げ、幕府に報告、改革に反映していたと言えるのである。農政改革における陰のキーマンだったと言っても過言ではないだろう。

2点目の成果は、享保の農政改革において活用された具体的な知識や情報を、道筑を核として検討し、〈知〉の流通・展開過程を明らかにしたことである。享保の農政改革は、在地の指導者層の〈知〉（地域社会の〈知〉）が欠かせなかった。本論では道筑と3人の村役人層（田中休愚・奥貫友山・池上幸豊）の思想形成過程を複合的に読み解くことを試みた。この結果、道筑と休愚、道筑と友山、道筑と幸豊など二者間の〈知〉の分析では見えてこなかった交流（ネットワーク）の側面が見えてきた。道筑は三人に学問の知識を授けるだけでなく、相互に知識や情報を交換・共有し新たな〈知〉を形成していたことが見えてきた。新たな〈知〉とは、学問知と在地に蓄積された知識・情報が結びついたより実践的な〈知〉のことである。地域社会の〈知〉をすくい上げ、改革に資する形で流通・展開させていったのが道筑だったと言うことができるだろう。さらに、思想形成過程を踏まえた関係性の分析は、埋もれていた新たなネットワークの解明にも有効だったと言える。

3点目の成果として挙げたいのは、幕臣・道筑と在地の指導者との〈知〉をめぐる関係の分析から、村役人層が抱える課題（悩み・葛藤）が道筑にも影響を与えていたことを示したことである。道筑は晩年、農事・農政に関する4点の書をまとめた『農事大全』を著した。道筑が『農事大全』に記したのは享保の農政改革への批判だった。道筑の農政論の最大のポイントは「農師」が不在であることへの批判だった。田中休愚と出会ったことにより、幕藩体制動揺の一因が地域社会の変容

がもたらす「ひずみ」にあることに気付いた道筑は、地域社会の〈知〉をすくい上げ、改革に活用・展開することで幕藩体制を安定的に維持しようと努めた。しかし、30年近くにわたる改革を経ても、地域社会の変容を背景とする幕藩体制の動揺は収まらず、道筑門下の村役人らは在地を指導する立場として「葛藤」し「苦悩」を深めていった。友山や幸豊の思想の分析から、上（公儀）からの重圧と下（百姓）からの突き上げの間で、悩み葛藤する両人の姿を明らかにした。村役人層の中に深まる苦悩や葛藤は、道筑にも影響を与えた。道筑は『農事大全』で享保の農政改革後も不安定さを増す地域社会の問題点を列挙し、最大の課題として、勸農を進めるべき「農師」の不在を強く指摘したと言える。

これまで幕藩体制は商品経済が発展する18世紀半ばを一つの契機として揺らぎ始めると指摘されてきた。宝暦・天明期が近世社会の転換期（画期）であることは間違いない。本論では、在地の指導者層の内面に蓄積されていった「ひずみ」が近世社会の転換（画期）を誘因したと考える。この「ひずみ」とは地域指導者の葛藤や悩みと同義である。村役人層が悩みを抱えたのは、この時期に限ったことではない。このため、今後、「悩み」や「葛藤」の実相を分析しなければならない。今後の課題である。

さらに、19世紀にかけて民衆の献策活動が活発化するが、享保の農政改革が地域社会の〈知〉を取り入れることで機能していたことから、これら18世紀後半の献策活動の萌芽を、道筑と村役人層との間の〈知〉をめぐる関係に求めることもできている。今後、村役人層の「悩み」や「葛藤」の実相の分析と合わせて解明していく必要があるだろう。

成島家は道筑以降、6代にわたり幕府の奥儒者を務める。現時点で分かっている限り、道筑の息子・和鼎、孫・仙蔵まで、池上家や奥貫家との交流を続けていることが分かっている。道筑と友山や幸豊らが形成した〈知〉はその後、どのように展開していったのか。道筑の息子や孫らと交友のある村役人層との関係に着目し、〈知〉の展開を分析していき、近代まで脈々とつながる〈知〉の系譜を分析していきたいと考えている。道筑の〈知〉を起点に、形成や流通・展開に関し成島家と村役人の家との関係性を問い続けることは、近世近代以降期に必要とされた〈知〉の実相を明らかにするだけでなく、さらなる人的ネットワークの解明にもつながると考えられるからである。

※本学位論文は、5年以内に出版予定である。